

マノスフィアの諸相

—アンチ・フェミニズムとミソジニーのオンライン・ネットワーク—

平井 智尚*

はじめに

本論ではアンチ・フェミニズムやミソジニー（女性蔑視・女性嫌悪）の共有によって特徴づけられるカテゴリーのオンライン・ネットワークである「マノスフィア」の諸相について主に学術的な研究の蓄積を手掛かりとしながら概観する。

マノスフィアは2009年に男性向けコミュニティのオンライン・ネットワークを表す言葉としてブログで使用され、2013年にポルノグラフィのマーケティングに従事するイアン・アイアンウッドが自費出版本『The Manosphere: A New Hope for Masculinity』のタイトルでその言葉を使用したことで広まったとされる (Ging 2019a)。学術的な論考では「マノスフィアとは、特定のマスキュリニティ形態を推進し、総じてフェミニズムへの嫌悪・侮蔑を表明するウェブサイトや組織の緩やかな連合体である」(Hodapp 2017: 8)、「マノスフィアは境界が流動的で相互の関係が緩やかなコミュニティの集まりとして説明されることが多い。共通する特徴として挙げられるのは、ミソジニー的な世界観と現代的文脈におけるマスキュリニティの再定義であり、マスキュリニティに関する一連のステレオタイプ的なモデルに依拠したパフォーマンスに関する様々なナラティブが用いられている」(Han and Yin 2023: 1936)、「マノスフィアは、フェミニズムの言説やレトリックに対抗的な姿勢を示す共通言語によって結びついた多様なコミュニティの集合体である」(Marwick and Caplan 2018: 553)、「大まかに言えば、マノスフィアとは、男性の問題やマスキュリニティに関心を寄せ、フェミニズムに対抗的な姿勢を示すウェブサイト、フォーラム、ブログ、動画ブログの緩やかな集まりを指す」(Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020: 163) といった定義がなされている⁽¹⁾。

これらの定義で「緩やかな」、「連合体」、「集まり」といった表現が使われているように、マノスフィアは具体的な組織や明確な境界を持つコミュニティではなく、本論でも取り上げる「ピックアップ・アーティスト (PUA)」、「インセル」、「MGTOW」などのカテゴリーの総称である。それぞれのカテゴリーの志向は必ずしも一致するわけではないが、アンチ・フェミニズム、ミソジニー、マスキュリニティ（男性性）といった価値観や思想は共通している。

マノスフィアについては、その一派であるインセルを自称する男性が2014年に米国で銃乱射事件（アイラビスタ銃乱射事件）を起こすなど社会的に関心を集めている。学術的な文脈においては、性別・ジェンダーの問題を扱うフェミニズムや男性学は言うまでもなく、ポリティカル・コレクトネス（政治的正しさ）と相反する保守思想の「オルタナ右翼」や、4chan ならびに Reddit といった電子掲示板サイトを中心とするオンライン・サブカルチャーの議論でもマノスフィアへの言及が

*ひらい ともひさ 日本大学法学部新聞学科 准教授

なされている。そうした学術的な研究蓄積を主たる材料としながらマノスフィアの諸相を概観する本論の試みに目覚ましい新規性や独自性があるわけではない。しかし、マノスフィアは歴史、思想、実態が入り組んでおり、現象の把握が難しい面がある。それゆえ、マノスフィアについて大まかな見取り図を示す本論の作業は、社会的な関心への応答として、そして、関連する研究を発展させていくための足場として意義を持つと考える。

1 マノスフィアの源流——男性の権利運動 (MRM)

マノスフィアの問題を扱ういくつかの研究では、その源流として「男性の権利運動 (Men's Rights Movement : 以下、MRM)⁽²⁾」が取り上げられている。MRMは、第二波フェミニズム、公民権運動、ニューレフト、反戦運動などに触発されながら1970年代に発展を遂げた男性解放運動を端緒とする (Hodapp 2017; Regehr 2022ほか)。男性解放運動は、とりわけジェンダーに基づく女性の性役割からの解放を掲げるフェミニズムに呼応する形で展開し、「男性の解放」にかかわる意識啓発グループやワークショップが大学を中心に結成された (Messner 1998)。この運動における「男性の解放」は以下のような考え方を指す。

「男性解放運動 (Men's liberation)」は、男性の性役割に対する並行的な批判から生まれた。女性が家庭に閉じ込められ、家事や家庭の雑用に拘束されていたのに対し、男性は家庭から追放され、魂のないロボットのような労働者に変えられ、男らしさの神話に縛られた結果、養育能力は財布を通じてしか発揮できなくなった。領域の分離は男性にとっても失望をもたらした。女性は感情の領域へ格下げされ、男性は感情の抑制が成功の条件となる公的なペルソナに追いやられたのだ (Kimmel 2013 : 103)。

しかし、男性の解放という言説は当初から内部矛盾を抱えていたとマイケル・メスナーは指摘する。すなわち、フェミニズムと手を携えながら、男性と女性がともに性役割からの解放を目指すグループと、マスキュリニティの代償を強調し、犠牲者としての男性を強調するグループに分かれていった。

1970年代中盤から後半にかけて、男性解放運動はこの亀裂に沿って明確に分裂した。一方では、明確なアンチ・フェミニズムを掲げる男性の権利運動が発展した。男性の権利団体は、狭義のマスキュリニティが男性にもたらす代償 (cost) を強調し、家父長制が女性を犠牲にして男性に利益をもたらしたとするフェミニストの主張を軽視する、あるいは激しく異議を唱えた。他方では、フェミニズム支持派 (時に「性差別反対主義者」とも呼ばれる) の男性運動が発展した。この運動で強調されたのは、女性と連帯して家父長制に立ち向かうことの重要性であり、男性の制度化された特権の廃絶を目標に掲げていた。フェミニズム支持派は、家父長制は男性を非人間化するかもしれないが、マスキュリニティの代償は男性の権力と結びついていると主張した (Messner 1998 : 256)。

マノスフィアへと連なる潮流は言うまでもなくアンチ・フェミニズムのグループに分類されるMRMである。メスナーの指摘のとおり、MRMは、家父長制社会が男性に利益をもたらし、女性

を抑圧しているといったフェミニズムの主張を批判し、マスキュリニティが男性にもたらす代償や犠牲者としての男性という立場を強調するようになった。フェミニズムに同調しながらジェンダーに基づく抑圧からの解放を追求するグループは1980年代以降も残存したが、勢いを増し、拡大していったのはMRMであった。クリスタ・ホダップはMRMの歴史を概観する中で、MRMには様々な派閥が存在するが「現代において、そして歴史的にも社会は女性を中心に回っており、女性の抑圧を主張する議論は茶番である。フェミニズムは男性を悪魔化しているとされるが、MRMは男性が女性のために不当なまでの犠牲を強いられてきたと主張する。経済的扶養、騎士道精神、兵役などを例に挙げ、MRMは男性の収入と生命が女性への奉仕のために常に危険に晒されていると主張する。したがってこの運動は、女性が男性を体系的に抑圧しており、その抑圧がフェミニズムによって強化され偽りの正当性を与えられている」(Hodapp 2017: viii) という共通の原則や信念が認められると指摘する。こうした原則や信念は、オンライン環境の進展に伴い顕在化したマノスフィアに見られる価値観や思想とも通じており、MRMがマノスフィアの源流に位置づけられることを物語っている。

2 オンライン・サブカルチャーとギーク・マスキュリニティ

前章ではマノスフィアの源流としてのMRMについて説明したが、マノスフィアの成り立ちを把握するうえでは、オンライン環境の発展とアンチ・フェミニズムやミソジニーの関係についても理解しておく必要がある。

MRMおよびマノスフィアに関する議論を概観すると、複数の論者が1990年代から2000年代にかけてMRMがオンラインで展開されるようになったことを指摘している。マイケル・キンメルは、MRMの活動家が被害者としての男性を強調する方向へと傾斜していった理由として、米国社会における経済の変動、父親としての権利の運動、インターネットの発展の三つを挙げている。ホダップは、現代におけるMRMの特質すべき点として、そのほとんどがオンライン上で展開される運動であると論じている(Hodapp 2017)。

オンラインにおけるMRMの代表例として複数の論者が取り上げるのは、「MRMの政治的側面を表す重要な事例」(O'Donnell 2022: 13) や「MRMの中核をなす組織拠点」(Hodapp 2017: xix) と位置づけられる「A Voice for Men (AVfM)」である。AVfMは2009年にポール・イーラムによって開設されたウェブサイトであり、「女性中心主義と男性の使い捨ての根絶」、「男性と少年が直面する特定の問題を解決する」、「すべての者に対する機会の平等を達成する」、「性別役割の強制に反対する」という主張をMRM全体の中核的目標として掲げている。MRMの潮流におけるAVfMの位置づけについて、創設者であるイーラムはAVfMによってMRMは結束力を獲得し、ネットワークの構築、包摂性の向上、男性の権利を人権として重視する姿勢を特徴する「MRMの第二波」をもたらしたと評している(Hodapp 2017)。ジェシカ・オドネルはAVfMの具体的な取り組みの一つとして「Register-Her」と呼ばれる関連サイトの活動を紹介している。同サイトでは強姦を犯した女性や性犯罪事件で虚偽の告発をした女性を登録し、リスト化すること目的としていた。さらにはMRMを嘲笑した若い女性の個人情報も登録の対象となっていたとされる(O'Donnell 2022)。また、AVfMはオンラインでの活動にとどまらず2014年に初の国際会議「International Conference on Men's Issues」を米国のデトロイトで開催し、MRMの祖とされる

ウォーレン・ファレルなどが講演を行った。⁽⁴⁾

マノスフィアの成立へと至る過程を説明する際に、その思想的な源流である MRM へさかのぼったうえで、AVfM のような MRM のオンライン展開に目を向けることは意義がある。しかし、AVfM のような組織拠点を持つオンラインの MRM と比較して「マノスフィアは多くの点で分散し多様である」(Hodapp 2017 : xix) という説明がなされているように、マノスフィアは MRM という運動や関連する組織体とは異なる性質を有しており、この特徴を把握するうえでは別の潮流にも目を向けなければならない。そこで焦点となるのはオンライン・サブカルチャーの領域である。

サラ・ソントンは、1980年代の英国におけるクラブカルチャーというサブカルチャー空間に見られる価値観と階層構造を「サブカルチャー資本」という観点で論じる中で、女子は「ヒップな」クラブカルチャーと比べて「ダサイ」ポピュラー音楽を「くだらないけど好き」(Thornton 1995 : 29) と半ば自虐的に宣言するというエピソードを取り上げている。そうした宣言は「彼女たちがサブカルチャーの階層構造を認め、その中で自らの低い立場を受け入れている」(ibid. : 29) とソントンは指摘する。こうしたソントンの議論をふまえながら、アンジェラ・ネーグルはオンラインで展開されるギーク的サブカルチャーにおける女性の位置づけについて次のように説明している。

主流の趣味を持つ、浅はかで自己顕示欲の塊のような頭の悪い女子がギーク的サブカルチャーへ入り込もうとすることへの嫌悪感は、ギーク的サブカルチャーの核心となっている。様々なギーク的オルタナ右翼のサブカルチャーで使われるお約束の設定 (common trope) は、正しいスラングやエリート知識の深さなど所属の判断材料となる正しい指標を、ギーク的サブカルチャーに加わろうとする女子が使いこなせないというものである (Nagle 2017 : 107 = 2025 : 203 訳文は既存の翻訳を参考にしつつ筆者が訳した、以下同)。

ギークについては、「ギークは意志と決意によって特定分野の専門家となる者のことである」(McArthur 2009 : 62) や「コンピュータに関して百科事典に匹敵する知識を持ち、それに病的なまでに執着しているが、社会的に不器用で、奇妙なパーソナリティを示し、ふつうの社会的・人間的な興味を排除し、自由な時間をコンピュータ上での「社交」に費やす人物」(Varma 2007 : 360) といった説明がなされている。もう説明を加えると、ギークの関心として「テクノロジー、科学、ポップカルチャー (特に SF、ファンタジー、コミックブック関連)、そしてゲーム」(Massanari 2017 : 331) といったジャンルが挙げられているように、ギークは日本社会で言うところの「オタク」に近いカテゴリーと言える。そして、ギーク文化は、「ギークは専門知識や特化した知識に価値を見出す。ギーク文化はそのような知識の習得や共有、そして他者への分配を中心に展開することが多い」(ibid. : 332) と説明されるような行動様式を指す。

あえて言及することでもないが、ギークやギーク文化自体は、オンラインを前提としているわけではない。しかし、ギークがテクノロジー、科学、コンピュータを嗜好することから、ギーク文化はオンライン、ならびにそこで醸成された文化と親和的である。「ギークのコミュニティをサブカルチャーと見なせるというのは明らかである。あるいはより正確に言うと、「サブカルチャー」という用語はインターネット上のギークコミュニティに対して一定の適用可能性を持つ」(McArthur

2009: 69)。このようなギーク文化とオンライン・サブカルチャーの不可分な関係に目を向けることで、MRMとは異なる系譜にあるオンライン上のアンチ・フェミニズムやミソジニーの潮流をとらえることが可能となる。

アンチ・フェミニズムやミソジニーと結びつくギーク的なオンライン・サブカルチャーとして真っ先に取り上げられるのは、電子掲示板サイトであり、その代表格の「4chan」である。4chanは2003年にクリストファー・プールによって創設された。同サイトは、アナーキーなネタや良識への嘲笑が尊ばれる「alt.*」や「サムシング・オーフル (Something Awful)」といったオンライン・フォーラムの文化を継承しつつ、日本の電子掲示板サイト「2ちゃんねる」や「ふたば☆ちゃんねる」に影響を受けていることから、「インターネットにおけるいかがわしい領域の一つ」(Coleman 2014: 47)として扱われてきた。具体的には「同サイト [=4chan]の文化は、極めて顕著なまでにミソジニー的であるというばかりでなく、ナード的な「ベータ」男性のアイデンティティを自ら嘲笑する自虐的な傾向も見られた。文化的指標として、戦争を題材としたビデオゲームや、『ファイト・クラブ』や『マトリックス』といった映画が含まれた。登録やログインの必要がないため、投稿のすべては「アノニマス (匿名)」というデフォルトのユーザー名で行われるのが一般的であった。この匿名文化はユーザーが自身の心の闇を吐露する環境を育んだ。この奇妙な仮想実験が生み出した環境の特徴として、気味の悪いポルノグラフィ、内輪ネタ、ナードの隠語、グロ画像、自殺、殺人、近親相姦、人種差別、ミソジニーが挙げられる」(Nagle 2017: 14=2025: 37-38 角かっこ内は筆者補足)。こうした説明から、オンライン・サブカルチャーの中核的なコミュニティである4chanにはマノスフィアに見られる男性のアイデンティティやミソジニーが根付いていたことがわかる。

ここまでマノスフィアに先立つアンチ・フェミニズムやミソジニーの潮流を把握する中でMRMのオンライン展開とギーク的なオンライン・サブカルチャーを取り上げた。フェミニズムへの呼応と反発を通じて展開されてきた社会運動とテクノロジーやポピュラー文化を嗜好するサブカルチャーの間には表向きの共通点はない。しかし、双方は「マスキュリティ」の概念において包含される。

前者のMRMに見られるマスキュリティについては「ヘゲモニック・マスキュリティ」として説明されることがある。ヘゲモニック・マスキュリティとは「ジェンダー実践のひとつの形態として定義できる。それは、男性に支配的地位と女性の従属性を保証している（あるいは保証していると考えられている）家父長制について、それが正当なのかという問題に対する、当面受け入れられている解答を体現しているのである」(Connell 2005=2022: 100)。ホダップは、MRMは男性の問題や経験を説明する際、ヘゲモニックなマスキュリティに大きく依存すると指摘したうえで、「マスキュリティの危機は、権力と支配の主張、そして、ヘゲモニック・マスキュリティへの回帰をもって解決を図ろうとする。MRMはフェミニズムへの強硬な抵抗と男性の権利を断固として主張することで解決の見込みを示す」(Hodapp 2017: 19)と論じている。

他方、後者のギーク的なオンライン・サブカルチャーに見られるマスキュリティは「ギーク・マスキュリティ」という概念で説明される。アドリエンス・マサナリは「ギークやナードの文化を論じることはマスキュリティ——特に白人男性のマスキュリティ——を論じることである」(Massanari 2017: 332)と述べたうえで、ギーク・マスキュリティについて「ヘゲモニック・マ

スキュリニティの要素を否定すると同時に具現化する」、[「ギーク・マスキュリニティは、社会的・感情的知性よりも知的能力を重視することで、しばしばハイパーマスキュリニティの要素を取り込む。同時に、ギーク・マスキュリニティは他の過剰なマスキュリニティの特徴を拒絶する」、[「ギーク・マスキュリニティは、ある種のテクノ／サイバーリバタリアニズムの精神も包含し、理性的で自律的な個人とメリトクラシー的な理想主義という考え方を重視している」といった特徴を挙げている。

以上のように、ヘゲモニック・マスキュリニティとギーク・マスキュリニティは相容れない面がある。「[ヘゲモニック・マスキュリニティは]「最も尊ばれる」男性像を定義し、他の（非ヘゲモニックな）マスキュリニティとのヒエラルキーを確立する」（Rothermel, Kelly and Jasser 2022 : 119 角かっこ内は筆者補足）という指摘のとおり、「ヘゲモニック・マスキュリニティ」と「ギーク・マスキュリニティ」という概念は男性間の権力関係も表している。しかし、男らしさの追求、男性の優越性と女性の従属、そして、男性は女性やフェミニズムの犠牲者であるという認識において双方に違いはなく、その共通性がアンチ・フェミニズムやミソジニーの共有を特徴とするカテゴリー間のオンライン・ネットワークであるマノスフィアを成立させるのである。

3 マノスフィアのカテゴリー

ここまでマノスフィアの背景にある運動や思想、ならびに文化の系譜を概観してきた。「マノスフィアは決して一枚岩ではなく、様々な派閥や人間が入り乱れているのが興味深い」（木澤 2019 : 207）という指摘のとおり、マノスフィアは単一の組織体やコミュニティではなく、アンチ・フェミニズムやミソジニーの思想を有する様々なカテゴリーのネットワークで構成されている。本節では既存研究の議論を手掛かりとしながら、マノスフィアを構成する代表的なカテゴリーを概観していく。

3-1 ピックアップ・アーティスト (PUA)

ピックアップ・アーティスト (PUA) とは「一言でいえば聴衆に向かってナンパ術を伝授する講師」（同書 : 207）、いわゆる「ナンパ師」である。ナンパは対面的な状況での女性に対する口説きや誘いを一般的には意味しており、PUA とオンラインはあまり結びつかないように見える。しかし、「ピックアップ・アーティストは「マノスフィア」に属する」（Dayter and Rüdiger 2022 : 15）や「初期マノスフィアの重要な構成要素は、オンライン上の「ピックアップ・アーティスト」(PUA) コミュニティ」（Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020 : 164）という説明のとおり、マノスフィアのカテゴリーの一つに数えられる。

アンドリュー・ステファン・キングの議論などをふまえると、PUA 現象は第一から第三段階に分類される (King 2018)。第一段階は PUA の起源であり、時代は先に取り上げた MRM と同じく第二波フェミニズムが台頭した1970年代初頭にさかのぼる。キングは PUA の嚆矢として、エリック・ヴェーバーの著書『How to Pick Up Girls』（1970年）とニコール・アリアナの著書『How to Pick up Men !』（1972）を取り上げ、両出版物においてナンパ文化は平等主義として推進され、そこでフェミニズムは平等という理想を女性に広めるものとして扱われたと指摘している。あわせて、PUA を第二波フェミニズムへの反動と見なすのは早計であるものの、ジェンダー平等の主張

から波及した女性の性的解放や婚前交渉の受容といった考え方はPUAの起こりと無関係ではないとキングは指摘している。

次いで、第二段階にあたる1990年代前半になると本論で焦点を当てているオンラインとの結びつきが見られるようになる。「1990年代にはインターネットの発展と女性のセクシャリティへの批判的視座の高まりを背景に、「ピックアップ」と誘惑文化の第二段階が台頭した」(ibid.: 300-301)。キングやパトリック・ハーマンソンらは、オンラインにおける最初のPUAコミュニティとして1990年代半ばに創設されたUSENETのフォーラム「alt.seduction.fast (ASF)」を挙げている。同フォーラムは、女性の誘惑に関する指南書(ナンパ本)『How to Get the Women You Desire into Bed』を出版したポール・ロス(通称:ロス・ジェフリーズ)の「速攻で口説く(speed seduction)」という思想やナンパ指南の宣伝を主眼としていたが、次第にナンパのテクニックを共有したりフィードバックしたりする場として活用されるようになった(King 2019; Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020)。

第三段階は、2000年代後半以降であり、ナンパ術は「誘惑産業」(Dayter and Rüdiger 2022)へと発展した。PUAは商業的な活動としてオフラインとオンラインで並行して展開されるようになる。「オフライン領域では、いわゆる巣窟で出会ったPUAたちが相棒として結束してゲームの技術を磨いたり、ナンパ技術を学びたいオーディエンスに向けて誘惑の専門家が講演を行ったり、コーチが弟子と個別指導セッションや本格的なブートキャンプを実施したりする。(略)しかし、オフラインとオンラインが重なるところは多く、前述の「オフライン」活動はいずれも動画共有プラットフォーム、ブログ、誘惑産業ウェブサイト記録・公開される。(略)PUAコミュニティや誘惑産業がオンラインで繁栄しているのは当然の結果である」(ibid.: 6)、「デジタル環境の内外を問わず、PUAの指導者たち(gurus)は、コースの完全版を収録した書籍やDVDの販売、セミナー、個別のコーチング・セッションなど、自身の手法を体系的に収益化するための複数のチャンネルを展開するのが一般的である」(Han and Yin 2023: 32-33)。

商業化やオンラインでの繁栄といったPUAの第三段階の展開からマノスフィアに見られるアンチ・フェミニズムやミソジニーの価値観や思想を読み取るのは難しい。しかし、「誘惑コミュニティは、テック産業などで経済的・キャリア的な成功を収めつつも、女性を口説くという「ハードル」をいまだ乗り越えられていない多数の異性愛男性への対応として現れた」、「PUAコミュニティにおいて男性は女性を誘惑し支配することで自信を獲得する。これは「ゲーム」を学ぶことで達成される。この訓練は女性を道具化し、物として扱うことを前提としており、女性は男性の成功や達成感の手段となる」、「PUAと誘惑コミュニティは自信を「教授する」手段として登場した。すなわち、女性が性的主体としての自信を持つことを奨励するポピュラーフェミニズムの台頭によって能力を否定されてきた男性たちに達成感を植え付けることを目的としていた」(Bratich and Banet-Weiser 2019: 5012)といった指摘をふまえるならば、PUAの第三段階の展開はアンチ・フェミニズムやミソジニーの体現であり、それゆえにPUAはマノスフィアの構成要素として位置づけられるのである。

3-2 インセル

インセル(incel)とは「involuntary celibate」の略語で、言葉通りに訳するならば「非自発的

な独身者」や「不本意の禁欲主義者」を意味する。具体的には「女性から（そしておそらくより広く社会全体からも）拒絶されていると感じている諸個人」（Regehr 2022：139）、「女性に対する自らの不器用さが理由で禁欲状態に置かれていると怨念を抱く男性たち」（Chang 2022：258）を指す。日本社会の文脈に引きつけるならば、「非モテ」や「喪男（モテない男）」といったネットスラングで説明されるような男性に該当する（木澤 2019）。

「インセル」のもとになった言葉は1990年代からオンライン上で使用されていたとされる。語源の一つとして、1990年代後半にカナダ人女性のアラナが性体験や恋愛経験のない自身を表現するために「involuntary celibate」という用語を考案したことが取り上げられる（Chang 2022）⁽⁵⁾。アラナは用語の考案から時を置かずに「アラナの非自発的独身者プロジェクト」を展開し、孤独や恋愛への困難に関連する記事を掲載し、メーリングリストを運用するウェブサイトを立ち上げた。こうした取り組みはインセルを支援するコミュニティの構築が目的であり、そこにはアンチ・フェミニズムやミソジニーの要素はなかった。しかし、コミュニティ内でミソジニー派と親フェミニズム派で対立が生じるようになり、前者の勢力が「インセル」のコミュニティを占めるようになった（Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020）。「皮肉なことに、その後インセルという言葉は、フェミニズムやポリティカル・コレクトネスの亡霊に苦しめられている現代社会が自分たちのような不器用で魅力に欠ける異性愛の男性を社会の最底辺へと追いやった、という信念を広める男性たちに利用された」（Chang 2022：258）。

オンラインに存在するインセル・コミュニティを対象とした研究では次のようなことが指摘されている。ロベルタ・リゲット・オマリーらは二つのオンライン上のインセル・コミュニティに投稿された8,000件超の書き込みを対象に質的な分析を行い、インセル・コミュニティは「性的市場」、「女性の本質的悪性」、「マスキュリニティの正当化」、「男性抑圧」、「暴力」という規範的秩序に基づき構造化されていることを明らかにした（O'Malley, Holt, and Holt 2022）。また、ケイトリン・リーガーはインタビュー調査やインセル・コミュニティに投稿されたコンテンツの分析を通じて、孤独感を抱く人が女性への怒りをおぼえ、ミソジニーや女性への暴力を正当化していく行動パターンを明らかにしている。「インセルの教化は、感受性の高い弱者を餌食にし、孤独で孤立した者を怒りに満ちた危険な存在へと変容させる。そして、豊饒なトキシック（有害）文化とデジタル・エコチェンバーのアフォーダンスを利用してレトリックを常態化し、定着させる。（略）暴力が発生すると、それは個人が経験する不安や怒りを表現する正当な手段として称賛される。アンチ・フェミニズムは大量殺人者の称揚を通じて物理的暴力の現実化へと展開し、さらには暴力的なミソジニーの行為がスクリーンから街頭へと移動し、そして再び動画としてスクリーンへと回帰する暴力のループを形成する」（Regehr 2022：153）。

インセルに関するいくつかの議論をふまえる限り、インセルにはミソジニーやアンチ・フェミニズムの思想が顕著に認められ、インセルというカテゴリーがマノスフィアの一角を占めているというのは論を待たない。ただし、先に取り上げたPUAとは表向きの特徴は異なっている。その一例として、インセルは自らを「弱者」や「最底辺」と位置づけていることが挙げられる。こうした位置づけは異性との恋愛における「アルファ男性」と「ベータ男性」の間にあるヒエラルキーの認識に基づくものである。「世の中の女たちがいかにアルファ男を好み、そして自分たちベータ男を蔑み、無視しているかを声高に語り合う」（木澤 2019：203）。PUAの主張や実践は「アルファ男性」

として女性を支配することにあるが、インセルは「ベータ男性」であることを自虐的に受け入れている。たがこうした差異はあくまでも表面的なものに過ぎず、マスキュリニティの確立という点では共通している。「彼ら [=ベータ男性] の極端なミソジニーや人種差別的な発言、そして、ハッキングやドッキングを頻繁に行うのは、オフラインの文脈では権力を行使できなくても、オンライン空間では男性のヘゲモニーを確立したいという願望を如実に表している」(Ging 2019: 651 角かっこ内は筆者補足)。その極端な形態として女性に対する暴力の正当化が挙げられる。⁽⁶⁾

2014年5月23日、米国のカリフォルニア州アイラビスタでエリオット・ロジャーという22歳の男性が拳銃、ナイフ、自動車によって複数人を殺傷した。事件を起こしたロジャーはインセルを自称し、自らに関心を持たず、見下す態度を取る女性への憎みを語った動画「エリオット・ロジャーの報復 (Elliot Rodger's Retribution)」を事件前に YouTube へ投稿していた。⁽⁷⁾ ロジャーの行動は一部のインセルの間で称賛され、そうしたコミュニティでは「ゴーイング ER (Elliot Rodger)」という合言葉のもとに女性へ危害を加えることは「当然の報い」として暴力が正当化された (Regehr 2022: O'Malley, Holt, and Holt 2022ほか)。2018年4月23日にカナダのオンタリオ州トロントで自動車による無差別殺人を起こした25歳の男性アレク・ミナシアンは、逮捕後に自らがインセルであると説明し、警察の取り調べに対して女性から性的に拒絶されることを許している社会への復讐行為として犯行に及んだと供述した。また、ミナシアンはアイラビスタで事件を起こす前のエリオット・ロジャーとオンラインで交流した経験があり、ロジャーの行動に感化されたとも語った (Regehr 2022)。つまり、自らを「弱者」や「最底辺」と自認していたとしても、むしろ、その自認こそがアンチ・フェミニズムやミソジニーの感情を掻き立て、「ギーク・マスキュリニティ」と接続する「ベータ・マスキュリニティ」の発露として「インセルの反乱 (Incel Rebellion)」が実行されるのである。

3-3 MGTOW

MGTOW は「The Men Going Their Own Way (自分の道を進む男たち)」の略語である。「MGTOW とは、女性との恋愛関係の追及をやめると誓い、自己啓発と保全に専念する男性のグループである」(Jones, Trott and Wright 2020: 1904)、「MGTOW としてより広く知られている「自分の道を進む男たち」のグループは、文字通り「自分の道を進む」ことを望むと主張する男性たちである。彼らは自分たちを分離主義者とみなし、女性に背を向け、自分自身へ回帰し、個人主義的で自己をエンパワーメントする生き方に価値を見出す」(Wright, Trott and Jones 2020: 908)。ジェシカ・オドネル (2022) は、MGTOW のような姿勢を示すグループは西洋に特有ではないと指摘したうえで、その一例として日本社会における「草食系男子」の存在を挙げている。また、周司 (2025) は、MGTOW は日本社会を文脈とするインターネット空間で語られる「弱者男性 (論)」に近いと論じている。

ここまで取り上げてきたマノスフィアを構成するカテゴリーとの関係では、PUA が実践する女性を誘惑する戦術に関心がないという点ではインセルと通じるが、インセルのようにアンチ・フェミニズムやミソジニーに基づいた女性への復讐、その極端な形態としての暴力を指向することはない。⁽⁸⁾ 前掲の定義にも見られるように、MGTOW は恋愛も含めて女性との関係を断絶し、ひいては社会からの離脱をも目指すような分離主義的アプローチを掲げている。「MGTOW コミュニティは

構成員の個人的成長に焦点を当てている。彼らは運動を自認せず、分離の道を選択した個人としてのライフスタイルの推奨以上に公的な影響力を行使しようとはしない。彼らは社会からの離脱こそが男らしさ (manhood) の体系的な搾取を回避する手段であると主張することすらある」(Han and Yin 2023 : 1931)。MGTOW が目指す「分離」は以下のようなレベルで展開される。⁽⁹⁾

レベル0：状況認識 (situational awareness)

レベル1：長期的な関係の解消 (同棲や結婚など)

レベル2：短期的な関係の解消 (友人関係やデートなど女性がかかわるものすべて)

レベル3：経済的な離脱 (エリートである「アルファ」や「シングルマザー」といった集団への支援につながるような課税をできるだけ回避する)

レベル4：社会の拒絶

MGTOW は女性に対する嫌悪や憎悪が認められるカテゴリーではあるものの、PUA のようにナンパ (術) に基づく女性の支配を通じて男性の優位性を獲得するという「ヘゲモニック・マスキュリニティ」の特徴は認められない。また、インセルのように憎悪を抱く対象への嫌がらせや攻撃といったギークの戦術を取り入れながら自らの優越性を誇示する「ベータ・マスキュリニティ」の様相も MGTOW には見られない。このように把握すると、MGTOW はマノスフィアを構成する他のカテゴリーとは同一の地平では扱えないように思える。MGTOW は PUA と対立し、インセルに対しては「ベータ」や「負け犬」と位置づけ「他者」と見なすこともあるという (Jones, Trott and Wright 2020 ; O'Donnell 2022)。しかし、分離主義的な MGTOW の言動にもマスキュリニティの特徴は認められる。

カラム・ジョーンズらは、MGTOW のグループに属する3名による約1万件にのぼる Twitter (現 X) への投稿を分析した結果、メッセージの内容に直接的で過激なハラスメントは認められないものの「受動的なハラスメント」(特定のターゲットを持たず、多くの潜在的な被害者に影響を与えるような広範なハラスメント) が行われていると指摘する (Jones, Trott and Wright 2020)。また、アン・カトリン・ローテルメルらは、MGTOW が自分たちを歴史上の偉大な男性と重ね合わせ、そうした人物は女性とかかわりを持たなかったがゆえに成功したと主張することにはヘゲモニック・マスキュリニティのステレオタイプの特徴が見られると述べる。

MGTOW は自らの集団を歴史化するため、自分たちを歴史上の「偉大な」男性たちの系譜に位置づける。彼らは、歴史上重要な男性たち (テスラ、ロック、ベートーヴェン、ファン・ゴッホ、「さらにはイエス・キリストさえ」) が、女性とのロマンティックな関係を避けたからこそ、その成功を達成し、自らの天才性を発揮できたという仮説を提示する。また、MGTOW は、男性は女性よりも生まれつきリスクを取る者、創造者、実行者になりやすいと固く信じており、それが男性を「文明の創造者」たらしめてきたと主張する。しかし彼らは、男性が相応の評価や尊敬を受けていないと考える。むしろ彼らは迫害を受け、男性を肯定する感情を承認しようとする試みは「トキシックでミソジニー的」と不当な烙印を押されていると感じている。そして、社会はますます「女性中心主義」、すなわち男性を犠牲にして女性を優遇する方向に向かっていると捉えている。こう

した信念の核心には、本質的に女性は男性に劣るという考えがある。MGTOW は、女性の唯一の力は美貌であり、その力は年齢とともに衰えると主張する (Rothermel, Kelly and Jasser 2022 : 127)。

4 レッドピル——マノスフィアをつなぐネットミーム

マノスフィアは、そのネットワークに位置づけられる各カテゴリーの志向は異なるが、アンチ・フェミニズムやミソジニー、それらの言説の基盤となるマスキュリニティという規範において共通性が見られる。ただし、共通性の担保に用いられる言葉は学術的な文脈で鑄造された概念であり、そうした概念に基づく「マノスフィア」という括りは外部の観察者による「ラベリング」ではないかという批判的な指摘も考えられる。そこで本章では当事者たちが使用する符丁である「レッドピル」⁽¹⁰⁾に焦点を当て、マノスフィアの理解をさらに深めていく。

「レッドピル」とは映画『マトリックス』の一場面に登場する言葉である。『マトリックス』の主人公ネオは自身の導き手であるモーフィアスによって2種類のうち一方の薬を飲む選択を迫られる。「ブルーピルを飲めば話は終わる。ベッドで目覚め、元の暮らしが待っている。レッドピルを飲めば不思議な国のウサギの穴の奥底へ降りて行ける」。物語の設定としては、「ブルーピル (青い薬)」を飲むとネオが現在生活する仮想世界での平和な暮らしを続けることができるが、「レッドピル (赤い薬)」を飲むとコンピュータが支配する現実世界で目覚めることになるという内容である。「レッドピル」は言うまでもなくフィクションにおける設定に過ぎない。しかし、「現実世界での目覚め」というレッドピルの設定は、社会にはびこる幻想を暴露し、真実の世界に向き合うことを示唆する符丁として流布するようになる。その主たる領域の一つがマノスフィアである。「マノスフィアはマトリックスのモチーフを自らの中心的な「哲学」として再解釈し、レッドピルを飲んだ男性はフェミニズムの女性中心主義的・ミサンドリー (男性嫌悪・憎悪) 的な体制に目覚めたと見なされている」(Ging 2019b : 47)、「マノスフィアにおいて「レッドピルを飲む」とは「人生の醜悪な真実への目覚め」を意味する。レッドピル思想はフェミニズムのミサンドリーと洗脳から男性を覚醒させると主張する。「レッドピル」グループのメンバーは覚醒という共通のナラティブのもとに集結する」(Rothermel, Kelly and Jasser 2022 : 122)。

先にも述べたように「レッドピル」はあくまでフィクションの設定に過ぎず、社会科学の研究蓄積を反映した「フェミニズム」や「マスキュリニティ」といった概念と比較したときに言葉の精度や密度は乏しい。しかし、人気を集めた映画の設定は多くの人たちにとって馴染みやすい、すなわち「ポピュラー」なものであり、ふつうの人たちがいかようにも読み解き、意味付与し得る記号という性質も有している。実際にマノスフィアの各カテゴリーではそれぞれの志向に即してレッドピルが解釈され、意味づけられている。

女性を技術とスキルで獲得・管理するという観念においてPUAと重なりを持つ「レッドピル・コミュニティ (レッドピラー)」では、人間の行動と心理は遺伝子の繁殖を最大化するように進化したという進化心理学の考え方とレッドピルを結び付けている。その考え方は、レッドピルを飲む、すなわち、進化心理学の原理を学ぶことで優れた性的戦略の実行が可能になるというものである (Van Valkenburgh 2018)。インセルは「レッドピル」と「ブルーピル」をもじった「ブラックピル」という言葉を作り出し、不幸な存在と絶望的な状態を表現している。常に自己中心的で残酷

である女性に絶望したインセルに対してブラックピルは時に暴力や自殺を促すのである (Regehr 2022)。MGTOW にとってレッドピルの服用は「プランテーションを離れ、新たな恋愛対象を常にキープしようとする (monkey-branching) 女性を避けることを意味する。これは日常生活における女性中心主義の影響を抑え、個人の主権を取り戻すために必要なステップ」(Wright, Trott and Jones 2020 : 921) とされる。また、インセルと同様に2種類の薬をもじった「パープルピル」という言葉を作り出している (Lin 2017)。

「レッドピル」という設定・言葉は意味が開かれており、アンチ・フェミニズムやミソジニーの思想を持つカテゴリーにおいて、それぞれの観念や志向に沿いながら解釈、そして改変されていった。このように複製や改変を繰り返しながらインターネット空間で拡散していく記号というのは、いわゆる「ネットミーム」に該当する。レッドピルが一種のネットミームとして広く受容・消費されたことで、PUA、インセル、MGTOW といったカテゴリーのネットワークであるマノスフィアは成立すると考えることができる。このことは「ミーム文化は視覚的な短縮表現という形で政治思想の拡散と論争へのアクセスを格段に向上させた」(Ging 2019b : 53)、「特にミームのフォーマットは即座に感情に訴えかける魅力を提供し、複雑な相互テキストのレイヤーを可能にする。ただし、ミームは高度な文化的素養を必要とする一方で、ジェンダー関係にかかわる体系化された理論を完全に収容することはできない」(ibid. : 54) という指摘と通じている。

加えて、ネットミームとしてのレッドピルはマノスフィアと別のネットワークを結びつける役割を果たした。そのネットワークとは「オルタナ右翼」である。「……2010年代半ばまでにマノスフィアはその出自を越えて独自の展開を見せ始めた。その一因は「レッドピルを飲む」という核心的な理念と進歩主義的な政治の柱、すなわち、フェミニズムの拒絶が、支配的なリベラル左派の諸原理を否定するオルタナ右翼の広範な潮流と共鳴し続けたからである」(Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020 : 171)、「ミームは、マノスフィアやオルタナ右翼のレトリックが「正常化」され、日常生活の「政治的」および「非政治的」な空間の双方で主流化されるうえでの重要なツールであり、公共圏におけるヘイト・イデオロギーの浸透をさらに促進するものである」(Mattheis and Waltman 2020 : 3)。

オルタナ右翼とは伝統や共和主義を軸とする既存の保守主義とは異なる、すなわち「オルタナティブな」(もう一つの) 保守思想を有する人たちであり、その活動は主にオンラインで展開されている。オルタナ右翼は「多文化主義者やリベラルエリート、「ソーシャル・ジャスティス・ウォーリア (社会正義戦士 : SJWs)」と呼ばれる人たちから「白人のアイデンティティ」が攻撃を受けているという信念を中核とする。それらの主体は「ポリティカル・コレクトネス」を利用して西洋文明と白人男性の権利を貶めようとする」(Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020 : 2) といった考え方を共有しているが、中核となる組織やリーダーは存在しない。「それは様々な人物やグループの集合体からなる多頭のヒュドラのようであり、そのいずれもが緩やかな運動の方向性を完全に掌握しているわけではない」(ibid. : 2) と説明されているように、オルタナ右翼はマノスフィアと同様にネットワークの形をとっており、レッドピルはそのネットワークを成立させる一つの符丁として機能する。

オルタナ右翼におけるレッドピルは、女性中心主義の体制から目覚め、真実と向き合うといったマノスフィアがつむぐ物語にとどまらず、より広範な価値観や思想、そして制度からの目覚めを含

意する。ハーマンソンらの指摘にも見られるように、オルタナ右翼は「ポリティカル・コレクトネス」や「ソーシャル・ジャスティス・ウォーリア（社会正義戦士）」と敵対する。「ポリティカル・コレクトネス」は、人種、宗教、性別、ジェンダー、セクシュアリティ、障害等に基づく偏見や差別を是正するために表現や態度に配慮する姿勢、ならびに取り組みを指す。また、「ソーシャル・ジャスティス・ウォーリア（社会正義戦士）」とは、ヒューマニズム、民主主義、人権意識、人種的平等、多様性、フェミニズム、LGBT、良識といったリベラル・デモクラシーの理念を重視し、社会に広めることを自らの使命とするような人たちを指す（木澤 2019；平井 2025ほか）。いずれのカテゴリーにも性別、ジェンダー、フェミニズムといったマノスフィアが反発する項目が含まれるが、総体としてはリベラル・デモクラシーで重視される理念として集約される。リベラル・デモクラシーを構成する理念、ならびにその理念を重視する者たちを嫌悪するオルタナ右翼にとっての「レッドピル」はリベラル・デモクラシーという幻想からの覚醒を意味する。そして幻想から目覚めた者たちは、リベラル・デモクラシーを育ててきた理性、平等、博愛といった諸価値、それらを総称する啓蒙思想を拒絶する「暗黒啓蒙」の思想・実践へと歩みを進めていく。

もちろん、マノスフィアとオルタナ右翼は完全に重なり合うものではない。「オルタナ右翼の極端な人種的・宗教的政治は、マノスフィア全体で一様の支持を得ているわけではない」（Hermansson, Lawrence, Mulhall and Murdoch 2020 : 173）という指摘もある。ただし、インセルに見られる女性への暴力の正当化や MGTOW に見られる離脱主義は、当事者たちがその自覚を持たないとしても、リベラル・デモクラシーの否定と通じるところがある。レッドピルというネットミームによって異なるネットワーク体が接合した結果、双方が共鳴し、広大かつ反動的なうねりへと発展する可能性は否めない。「……マノスフィアの近年の展開が示すように、オンラインで育まれてきた怨念に満ちた世界観がその長期的な影響として残るかもしれない」（ibid. : 173）という指摘はあながち大げさとも言えないのである。

おわりに

本論ではアンチ・フェミニズムやミソジニーの価値観や思想を共有するカテゴリーのオンライン・ネットワークである「マノスフィア」の諸相を概観した。「マノスフィア」はネットフリックスのドラマシリーズ『アドレセンス』（2025年）でテーマとして扱われたこともあり、学術的な文脈以外でもその言葉や思想は知られるようになった。フェミニズム、そして女性に対する蔑視・嫌悪を特徴とするという点に限ればマノスフィアの把握は容易であり、大まかな認識としてはそれで事足りる。

しかし、マノスフィアの源流や歴史的展開、マノスフィアを構成する各カテゴリーに見られる志向の差異と共通性、オルタナ右翼のような異なるネットワーク体との結びつきなど、マノスフィアは極めて入り組んでおり、系統立てて把握するのは存外に困難である。さらには、マノスフィアという組織や集団は存在せず、その概念は観察者のラベリングによって構築されたカテゴリーに過ぎないという段階まで話を進めると論そのものが瓦解する可能性もある。本論は既存研究の蓄積に依拠してマノスフィアの歴史、思想潮流、カテゴリーを整理したに過ぎないが、複雑な要素が絡み合ったマノスフィアの実態をある程度まで描写することはできた。あわせて、「レッドピル」というネットミームを通じて、アンチ・フェミニズムやミソジニーを共有するカテゴリー同士が結ばれ

ることを論じたことで、マノスフィアが単なる「でっち上げ」とは言えないことも示せた。本論に顕著な新規性や独自性はないが、マノスフィアの理解を深める取り組みは、現段階においてそれ自体に意味があると考えられる。

今後の課題としては、既存研究の継ぎ接ぎによる概説とどまらず、マノスフィアを構成するカテゴリーの深掘り、マノスフィアを貫く思想、ケーススタディなど焦点を絞った研究を展開していくことが挙げられる。関連して、日本社会に焦点を当てた研究も検討する必要がある。日本社会では北米の文脈で論じられる規模のマノスフィアを同定するのは今のところ困難である。しかし、アンチ・フェミニズムやミソジニーに相応する言説は日本社会を文脈とするインターネット空間にも認められる。例えば、ジェンダー、とりわけ女性が対象となるバイアス、ハラスメント、差別などの問題を指摘する SNS の投稿やアカウント・人物に対する「フェミ」や「ギャオオオオン！」といったネットスラングを交えた嘲笑や罵倒は日常化している。また、性器をもじった言葉で女性を呼称することや、「女さん」のようにあえて敬称をつけた言葉で女性を小馬鹿にするようなこともインターネット空間においてはありふれている。その他にも、先に述べたように「非モテ」や「喪男（モテない男）」といったネットスラングが「インセル」と通じることや、「リア充／非リア（充）」、「陽キャ／陰キャ」、「弱者男性」、「チー牛」といった女性とのかかわりにおける困難や格差を含意するネットスラングが数多く存在していることなど、本論で取り上げたマノスフィアに見られる特徴は日本社会においても確認される。⁽¹¹⁾ こうした背景をふまえるならば、日本社会を文脈とするインターネット空間を対象にマノスフィアという概念を用いながら考察することは可能であり、かつ必要であると考えられる。そしてその先にはマノスフィアの国際比較のようなアプローチも想定される。本論の取り組みに目新しさはないが、マノスフィアの研究を発展させていくための第一歩としては若干の意義を認めることができるだろう。

参考文献

- 木澤佐登志 (2019) 『ダークウェブ・アンダーグラウンド——社会秩序を逸脱するネット暗部の住人たち』 イースト・プレス
- 酒井美優 (2023) 「ウェブ上の「弱者男性論」にみる男性の被抑圧者としての意識——マノスフィアとの比較を通して」『日本ジェンダー研究』第26号：93-105
- 周司あきら (2025) 『ラディカル・マスキュリズム——男とは何か』 大月書店
- 多賀太 (2019) 「男性学・男性性研究の視点と方法——ジェンダーポリティクスと理論的射程の拡張」『国際ジェンダー学会誌』第17号：8-28
- 平井智尚 (2025) 「デジタルメディアともう一つの公共性」『ジャーナリズム&メディア』第24号：61-73
- Bratich, Jack and Banet-Weiser, Sarah (2019) From Pick-Up Artists to Incels: Con(fidence) Games, Networked Misogyny, and the Failure of Neoliberalism, *International Journal of Communication*, Volume 13, 5003-5027, USC Annenberg Press.
- Chang, Winnie (2022) The Monstrous-Feminine in the Incel Imagination: Investigating the Representation of Women as “Femoids” on /r/Braincels, *Feminist Media Studies*, Volume 22, Issue 2, 257-270, Taylor & Francis.
- Coleman, Gabriella (2014) *Hacker, Hoaxer, Whistleblower, Spy: The Many Faces of Anonymous*, Verso.

- Connell, Raewyn (2005=2022) *Masculinities: Second Edition*, University of California Press. (伊藤公雄訳 『マスキュリニティーズ——男性性の社会科学』新曜社)
- Dayter, Daria and Rüdiger, Sofia (2022) *The Language of Pick-Up Artists Online Discourses of the Seduction Industry*, Routledge.
- Ging, Debbie (2019a) Alphas, Betas, and Incels: Theorizing the Masculinities of the Manosphere, *Men and Masculinities*, Volume 22, Issue 4, 638-657, SAGE.
- (2019b) Bros v. Hos: Postfeminism, Anti-feminism and the Toxic Turn in Digital Gender Politics, In: Ging, Debbie and Siapera, Eugenia (2019) *Gender Hate Online: Understanding the New Anti-Feminism*, Palgrave Macmillan.
- Han, Xiaoting and Yin, Chenjun (2023) Mapping the Manosphere: Categorization of Reactionary Masculinity Discourses in Digital Environment, *Feminist Media Studies*, Volume 23, Issue 5, 1923-1940, Taylor & Francis.
- Hermansson, Patrik, Lawrence, David, Mulhall, Joe and Murdoch, Simon (2020) *The International Alt-Right, Fascism for the 21st Century?*, Routledge.
- Hodapp, Christa (2017) *Men's Rights, Gender, and Social Media*, Lexington Books.
- Jones, Callum, Trott, Verity and Wright, Scott (2020) Sluts and Soyboys: MGTOW and the Production of Misogynistic Online Harassment, *New Media & Society*, Volume 22, Issue 10, 1903-1921, SAGE.
- Kimmel, Michael (2013) *Angry White Men: American Masculinity at the End of an Era*, Nation Books.
- King, Andrew S. (2018) Feminism's Flip Side: A Cultural History of the Pickup Artist, *Sexuality & Culture*, Volume 22, 299-315, Springer.
- Lin, Jie-Liang (2017) Antifeminism Online: MGTOW (Men Going Their Own Way), In: Frömring, Urte Undine, Köhn, Steffen, Fox, Samantha and Terry Mike (eds.) *Digital Environments: Ethnographic Perspectives across Global Online and Offline Spaces*, Transcript Verlag.
- Marwick, Alice E. and Robyn, Caplan (2018) Drinking Male Tears: Language, the Manosphere, and Networked Harassment, *Feminist Media Studies*, Volume 18, Issue 4, 543-559, Taylor & Francis.
- Massanari, Adrienne L. (2017) #Gamergate and The Fapping: How Reddit's Algorithm, Governance, and Culture Support Toxic Technocultures, *New Media & Society*, Volume 19, Issue 3, 329-346, SAGE.
- Mattheis, Ashley A. and Waltman, Michael S. (2020) Gendered Hate Online, In: Ross, Karen (eds.) *The International Encyclopedia of Gender, Media, and Communication*, Wiley-Blackwell.
- McArthur, John A. (2009) Digital Subculture: A Geek Meaning of Style, *Journal of Communication Inquiry*, Volume 33, Issue 1, 58-70, SAGE.
- Messner, Michael A. (1998) The Limits of "The Male Sex Role": An Analysis of the Men's Liberation and Men's Rights Movements' Discourse, *Gender & Society*, Volume 12, Issue 3, 255-276, SAGE.
- Nagle, Angela (2017=2025) *Kill All Normies: Online Culture Wars from 4chan and Tumblr to Trump and the Alt-Right*, Zero Books. (大橋完太郎訳・清義明監修 『普通の奴らは皆殺し——インターネット文化戦争、オルタナ右翼、トランプ主義者、リベラル思想の研究』Type Slowly)
- O'Donnell, Jessica (2022) *Gamergate and Anti-Feminism in the Digital Age*, Palgrave Macmillan.
- O'Malley, Roberta Liggett, Holt, Karen and Holt, Thomas J. (2022) An Exploration of the Involuntary

- Celibate (Incel) Subculture Online, *Journal of Interpersonal Violence*, Volume 37, Issue 7-8, 4981-5008, SAGE.
- Regehr, Kaitlyn (2022) In(cel)doctrination: How Technologically Facilitated Misogyny Moves Violence Off Screens and On To Streets, *New Media & Society*, Volume 24, Issue 1, 138-155, SAGE.
- Rothermel, Ann-Kathrin, Kelly, Megan and Jasser, Greta (2022) Of Victims, Mass Murder, and “Real Men”: The Masculinities of the “Manosphere”, In: Carian, Emily K., DiBranco, Alex and Ebin Chelsea (eds.) *Male Supremacism in the United States From Patriarchal Traditionalism to Misogynist Incels and the Alt-Right*, Routledge.
- Thornton, Sarah (1995) *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*, Polity.
- Van Valkenburgh, Shawn P. (2018) Digesting the Red Pill: Masculinity and Neoliberalism in the Manosphere, *Men and Masculinities*, Volume 24, Issue 1, 84-103, SAGE.
- Varma, Roli (2007) Women in Computing: The Role of Geek Culture, *Science as Culture*, Volume 16, Issue 4, 359-376, Taylor & Francis.
- Wright, Scott, Trott, Verity and Jones, Callum (2020) ‘The Pussy ain’t Worth it, Bro’: Assessing the Discourse and Structure of MGTOW, *Information, Communication & Society*, Volume 23, Issue 6, 908-925, Taylor & Francis.

注

- (1) 周司あきら (2025) はマスキュリニティ (masculinity) の訳語は「男らしさ」と「男性性」の二つがあり、双方が同一視される機会も多いと指摘する。続けて周司は「男らしさ」が日常用語であり、「男性性」は学術用語・分析概念であることや、「男らしさ」に付随する肯定的なニュアンスに比して、「男性性」は否定的な要素も含めた「男性ならこういうもの」という包括的な語であると論じている。
- (2) 「男性の権利運動 (Men’s Rights Movement : MRM)」に関する議論では、「男性の権利活動 (Men’s Rights Activism : MRA)」や MRM の支持者を指す「男性の権利活動家 (Men’s Rights Activists : MRAs)」といった類似の表記が見られ、内容が混在している場合もある。多賀太 (2019) は、男性が被る様々な抑圧や害を「男性差別」の結果と見なす運動の潮流として「男性の権利運動 (Men’s Rights Movement)」を取り上げており、そうした説明などをふまえて本論では原則として「男性の権利運動 (MRM)」という表記で統一する。
- (3) A Voice for Men 「Objectives」
<https://avoicemen.com/objectives/> (本論に記載の URL はすべて2026年1月7日に確認した、以下同)
- (4) TIME (July 2, 2014) 「What I Learned as a Woman at a Men’s-Rights Conference」
<https://time.com/2949435/what-i-learned-as-a-woman-at-a-mens-rights-conference/>
- (5) The Guardian (April 26, 2018) 「This article is more than 7 years old Woman behind ‘incel’ says angry men hijacked her word ‘as a weapon of war’」
<https://www.theguardian.com/world/2018/apr/25/woman-who-invented-incel-movement-interview-toronto-attack>
- (6) ドキシング (Doxing) とは、個人が特定できる情報を悪意を持ってインターネット空間に無断で公開する行為、いわゆる「晒し」を意味する。

- (7) Los Angeles Times (May 24, 2014) 「Transcript of the disturbing video ‘Elliot Rodger’s Retribution’」
<https://www.latimes.com/local/lanow/la-me-ln-transcript-ucsb-shootings-video-20140524-story.html>
- (8) 周司も「ミグタウ [MGTO] も女性蔑視な認識を抱いている点は同じだが、インセルのような攻撃力は低い」(周司 2025: 220-221 角かっこ内は筆者補足) と指摘している。
- (9) MGTO の分離段階については明確な出典を確認することができず「レベル0」を含まない4段階の説明なども散見される。ただし、説明の大枠には齟齬は認められない。本論の記述に際しては木澤 (2019) や下記の記事などを参考とした。
- The Guardian (August 26, 2020) 「Men going their own way: the rise of a toxic male separatist movement」
<https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2020/aug/26/men-going-their-own-way-the-toxic-male-separatist-movement-that-is-now-mainstream>
- (10) マノスフィアとレッドピル、ならびに後述するマノスフィアと保守思想のネットワークとの重なりは周司 (2025) の議論も参考になる。
- (11) 酒井美優 (2023) は、日本社会に見られる「弱者男性論」とマノスフィアの言説を比較し、双方の共通認識として「社会的繋がり最たるものは恋愛や結婚であり、それが得られない自分たちは弱者である」という前提があるものの、自意識形成、男性同士の連帯、女性やフェミニズムへの態度に違いがあると論じている。